



ランチオンセミナー 9

小児のアトピー性皮膚炎と スキンケア

～よりよい肌をめざして～

座長 室田 浩之 先生 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 皮膚病態学分野 教授

講演 1 アトピー性皮膚炎の発症予防を、
適切なスキンケアと炎症の抑制から考える

堀向 健太 先生 東京慈恵会医科大学葛飾医療センター 小児科 助教

講演 2 小児アトピー性皮膚炎とスキンケア指導

馬場 直子 先生 神奈川県立こども医療センター 皮膚科 部長



2021年 **10**月**31**日(日) 12:30～13:30

会場

D会場

[シーガイアコンベンションセンター2F 中会議室 オーチャードルーム 北]

講演 1

アトピー性皮膚炎の発症予防を、適切なスキンケアと炎症の抑制から考える

堀向 健太先生 東京慈恵会医科大学葛飾医療センター 小児科 助教

小児のアトピー性皮膚炎(Atopic dermatitis;AD)の多くは乳児期に発症し、他のアレルギー疾患の発症リスクになる。すなわちアレルギーマーチのきっかけになるということは複数の研究結果から示されている。皮膚バリア機能低下を反映する経表皮水分蒸散量(TEWL)高値は、その後のAD発症を予測することも示されている。そして新生児期からの保湿剤の定期塗布がアトピー性皮膚炎の発症予防に有効というランダム化比較試験が複数報告され、さらにPEBBLES試験(フェーズ2)は、感作も予防し得るかもしれないという結果を示し、ADやアレルギーマーチを予防し得るのではないかという期待が高まっていた。しかし2020年に同様の手法でAD発症予防を試みた大規模ランダム化比較試験BEEP試験・PreventADALL試験は、『新生児期からの保湿剤使用はAD発症予防に働かない』という結果だった。本講演では、これらの矛盾に関し現状の情報を整理し、保湿剤だけでなく適切な抗炎症薬による早期介入も必要であろうことを述べる予定である。

講演 2

小児アトピー性皮膚炎とスキンケア指導

馬場 直子先生 神奈川県立こども医療センター 皮膚科 部長

小児のアトピー性皮膚炎診療がうまくいくかどうかは、治療のキーパーソンである母親に、正しい日常のケアと治療を、手を抜かずに毎日実践してもらえるかどうかにかかっている。従って我々皮膚科医は、日々のスキンケアや軟膏処置、環境を整え悪化因子を避ける対策などをしてくれる母親を、いかに教育・指導し、手助けするかに精力を注ぐべきと思う。そのためには、まずは母親を味方につけたうえで、アトピー性皮膚炎の病態は皮膚が乾燥しやすくバリア機能が弱い性質と、アレルギーを起こしやすい性質とを、素因として持っていることを理解させ、治療に重要な3本柱について説明する。

アトピー性皮膚炎治療の基本原則は、1)悪化因子の検索とその対策、2)スキンケア、3)薬物療法の3本柱であり、その中でも軟膏の選択と塗り方は最も大切である。軟膏の塗り方は必ず実践して塗り方をみせ、塗らせてみて、適量を毎日塗れるように指導する。さらにプロアクティブ療法で、寛解維持をすることの必要性を、小児の生活のQOLや心身の発達にも寄与することを強調し、母親のモチベーションを高めることを意識して指導している。